

オバロ、エタっちやったよシリーズ

神坂真之介

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

数年前に書こうとして、続き書けなくて、寝かしておいたよ。そゆのを乗せて行くという自己満足シリーズ。

いや、このまま放つとくのも作品に可哀想かなと思って。

無駄に強力設定なキャラが出てきて、ナザリックと総力戦したりする予定だった話とか

ガゼフ超強化して大虐殺でモモンガさんとデュエルする話とか

デスナイトに中の人がかーとか

型月とクロスしようぜとか、そんな感じで作者の実力が圧倒的に足りない事に気づいた（今更）という話である。

基本的に、エターナルヴォークス 根源『』といふかに飲まれて逝くが定めよ……（遠い目）

目次

ふあて、おーばーろーど1	1
ふあて、おーばーろーど2	8
ふあて、おーばーろーど3	16
デスナイト入ってます！	26

ふあて、おーばーろーどー

此処ではない何処か。

現在いまでは無い何時か。

金色に色付く草原で、暁の様な、黄昏の様な光に照らされて微睡み
佇む者が居る。

穏やかな草原の風と共にある姿は何処か神々しい。

閉ざされた瞳はそのままに、顔（かんばせ）はただ真つすぐに前を
向く。

永遠に変わる事の無い一枚の絵画の様な情景。

不意に変化が訪れた、目前に光が結実する、光の輪を描き、揺らめ
き輝く伶俐な光

佇む者のその瞼がぴくりと震えた。

「」。

「」？

「」。

光輪がリズムをとる様に明々する

対して囁くような言葉が一言二言と紡がれ、何事かに納得するよう
に頷くと

一瞬、暁の光が強く辺りに指しこみ目が眩む様な輝きを見せる。そ
して光が和らいだ時には佇む者の姿も光輪の輝きも何処にもなく
なっていた。

ユグラドシルと言うゲーム盤がある。

数多く生まれそして消えていった数多電腦遊戯の中で一時代を築
いたタイトル。

時代の流れ、技術の発達、新しい遊戯世界の樹立、それらに押され

十年を超える時を君臨したそれにも陰りが見えて久しい。

観測者である我々はこのゲーム盤が特別なものになる事を知っている。

数多の内の一握りが、朽ち果て行く現実から、新たな新世界へと旅立って行く事を知っている。

あるものは神となり、人々の未来の礎となり

あるものは霸王となり、世界の調停者達と相争い。

あるものは英雄となり、種の垣根を超えて希望を示した。

そしてあるものはすべてに平等な死を振りまく魔王となりえる。

いまだ知りえぬ過去と、いまだ未確定の未来が此処にある。

我々観測者は最も主流となる流れを元に、多くの支流世界を観測する事を好んでいる。

あり得る世界、確率的にあり得ない世界、それらを可能な限り育つように見守り、ときに栄養となるものを注ぐ。

此度もまた、新しい可能性を、一つもたらそう。

この世界が大きな大輪となるか、それとも、小さく朽ちるか、それはまだ、誰にもわからない。

・ナザリック大墳墓

ユグラドシルにはアインズ・ウール・ゴウンと言う名のギルドがある。

かつては、全ギルド中トップ10のうち一つに数えられたほどの精鋭ギルド、最大ギルドが三千人を超え、他のギルドも百を下る事は無い中、たったの41名でその位階に上り詰めた精鋭中の精鋭と言うべきギルドである。

その最大の特徴は構成員全員が異形種であり、人間種プレイヤーに対してのPKを掲げている事だろう。

かつて彼らのギルドナザリック大墳墓で起きたギルド防衛線における1500を超えるプレイヤーの大敗はユグドラシルプレイヤーであれば語り草である。

そんな、隆盛を誇った大ギルドであるが、現在活動しているギルドメンバーは一人しかいない。

ギルドメンバー達それぞれは、職場環境の変化、家庭の事情、夢を叶えた結果、そんな個々の事情により、ゲームにログインが難しくなり、一人、また一人と引退してしまっていた。

偶に、懐かしみ顔を見せる者達が居ない訳でもないが、大半が引退を機にその姿を見る事は無くなってしまっていた。

毎日仕事を終えてログインしては誰も居ない日々。

誰も居ない円卓を見渡せば寂しさもひとしお堪えるものがある。

女々しいとも思うが、もし仲間達が帰ってきた時、帰る場所が残っていないなんて寂しいではないか。

だから彼、アインズ・ウール・ゴウンのギルドマスター、モモンガは今日もギルドを維持するためにユグドラシルの狩場に出稼ぎに出かける。

ギルドホームを維持するためには相応の量のユグドラシル金貨が必要になる。

小さな規模の拠点であれば維持するための通貨はそれ程必要ないがナザリック大墳墓程の有数な規模の大型拠点であれば、その維持に必要なとなる金銭は莫大なものとなる。

それを一人で支えるには多くの金銭的な工面が必要だ、だが、ちよつとやそつとの実入りが良い程度の狩りの収入で拠点を支える事は出来ない。

また、彼は社会人でもある、常にゲームにログイン出来る訳でもない、普通のやり方では事実上不可能といっても良いだろう。

仲間達が残したものは質、量ともに大きな力となるだろうが、彼はそれに手を付ける気はない。

故に彼は社会人ならではの方法でユグドラシル金貨を稼ぐ事にした。(※)

簡単に言えばリアルマネーの力である、ネット上から業者を雇い、雇われプレイヤーにゲーム内通貨を稼がせ維持費に充てたのだ。

ちなみに時給制ではなく稼いだ通貨に応じた換金制、一日に一定以上の通貨を納品する事により、固定金額が入金される。

一定を超えた通貨はその額により、追加報酬として増える。

業者との業務内容の交渉には彼が仕事で培った営業経験により、割と良い内容に収まったと思う。

新しいギルドメンバーを入れれば良いという意見もあるかもしれないが、アインズ・ウール・ゴウンは悪名高き異形種のDQNギルドとして有名過ぎた。

入団を求めるものはごく少数であり、多くが性格や性質がモモンガにとつてかつての仲間にあぶくもない者達であつたし、中には他ギルドのスパイであつたり、ギルドが保持する世界級アイテムを狙う盗人すらいた。

ぶにつと萌えさんを主軸にして仲間達が考案した「面接判断術」や「スパイ炙り出しマニュアル」が無ければ幾つか貴重なアイテムや拠点情報が流出していたかもしれない、そのお陰も在り、平穩を保っている。

ごく少数ではあるが友好的な非公式同盟ギルドや個人も居る、多くは仲間達と同じように引退したり連絡が取れなくなつてしまつたが。

いまだ、繋がりが保たれた者達も居るのだ、ただし、彼等は彼等の都合がある、此方の都合の負担を申し出る気はやはり彼にはない。

「もう少し貴方は我儘を言つても良いと思うのですが」

そう言つたのは、ギルド外の友人の一人であつたか。

ともあれ、幾つかの収入手段を用意しているモモンガだったが、それでも稼いでおくに越した事は無いのだ。

出来る限り、維持費には余裕を持たせておきたい、という不慮の事態により、稼げない事が起きるかわからないのだ。

ゲームにしても、現実にしても、何処で不備が起きるかはわからない。

アークロジの一角にウイルスが蔓延し、閉鎖されたというニュー

スがあつたのは極最近でもあつたのだし。

12年と言う長い経験により発見したいくつかの実入りの良い狩場を効率的に回る。

上手くすれば2時間程でナザリック維持に必要な財貨の2〜4%を稼ぐ事が出来る。これらを月に20回繰り返す事で業者の分も合わせて黒字の収益を得る事が出来る。

もっと多くの時間を消費できれば、と思うが、現実の生活もあるモモンガにはそれが限界だった。

それにゲームでの活動時間はなにも狩りだけで済むわけでもないのだ。

時刻を見れば24時になろうとしていた、今日は現実の仕事が早く終わったので多くゲームに時間を割けたが、明日も早い、作業が終わったなら早くログアウトするべきだろう。

ふと拠点の状況を見ると、幾つかの罠が作動し守護者達が撃破されている事に気づいた。

それは第6階層にまで及び、少なくとも被害と言える、通常であれば驚き、舌打ちの一つでもする所だが、口から出たのは冷静で感心したような感想だ。

「ああ、今日はそこまで来れたのか。」

最近の日常と言うほど頻繁ではないが、定期的な周期で来る攻略者であり同一人物の仕業であるとモモンガは知っていた。

それはソロでナザリック攻略を目指すという変わり種のプレイヤーであつた。

変わり種ではあつたが、ソロで第六階層まで至った時点でそのプレイヤースキルは推して知るべしである。

まあ、もつとも、このプレイヤーがナザリックに挑むのは通算1131回を越えている。

仲間達が居ない以上、モモンガにとっては維持するのが手一杯であり、罠の更新や新要素にまで割くだけの時間がない。デザインセンスもない。

常に同じ仕掛けであるなら、時間をかけて攻略していくことはソロ

でも可能だろう。

突破された罫や倒された守護者の再構築のための消費がかなり痛くなるのだが、この侵入者、毎回倒されるまで粘るため多くの装備品を落としていく、ドロップ品が神器級アイテムや準神器級、伝説級な為、転売するとむしろ収支は大きくプラスになる。ある意味美味しい相手だと言えた。

最近では本人が直接言い値で買い戻しに来るので転売する必要もないくらいである。

メール欄を確認してみると新着メッセージが着信していた、件のプレイヤーからのものである。

添付ファイルにはユグラドシル金貨がプレゼンされている。価格は此方にあるドロップ装備の総額の大体2割増し相当。

そして短いメッセージが二つ。

『今日もクエストお疲れ様です』

『明日もアタックするのでよろしく』

通常の売買システムのルートに乗せない実に不用意な手段であった。

不心得者とこのようなやり取りをすると、現物だけを奪われ交換の商品が来ないと言う事が割とある。

もつとも、知人であろうと、他人であろうと、敵以外にはそんな下らない事はプライドにかけてモモンガはやる気はないし、やる筈がないという信頼故だろう。

そもそも、かのプレイヤーとの付き合いは長い。

それこそ、ペロロンチーノさんや、たつちみーさん達がまだ元気にアインズ・ウール・ゴウンで活動していた頃からだ。

知らない仲どころか結構親しい仲だと思っている。

彼が人間種でなければ、41人の仲間達は42人であったかもしれないくらいには。

正直、彼が此処に挑むのはチャレンジャー精神もあるだろうが、むしろ活動資金を払う口実なのではないだろうか。

一度、維持費についての話を振られた事がある、その際に手伝いを

灰めかされたが、友人達と築いたギルドに他人の手を借りたくなかった事、知人ではあっても深い交友関係では無かったため、当時は遠まわしにお断りした覚えがある。

他者の手を借りたくないという意地と、ある種の独占欲、そして無償の援助への猜疑心があった事は否めない。

その時、彼は深くは問わず、『困ったときは頼ってください、友なのですから』ただそう言ってその話を切り上げた事を、モモンガは妙に鮮明に覚えている。

いつのまにか彼には友だと認識されていたらしい、そう、思うのは自分が乾いているからだろうか。

それとも、ギルドメンバー以外にも友だと言われた事が自分にとって何か琴線に触れたからなのか。

自問したが何故か胸の奥のモヤの様な気持ちは明確な答えにはならなかった。

「やれやれ、まったく」

溜息と苦笑を吐きながら装備一式をメールと添付ファイルに変えて送り返す。

『あのですね、不用意ですから、ちゃんと正規のルートで交換しましょうよ、セイバーさん』

そんな文と一緒に。

ふあて、おーばーろーど2

アインズウールゴウンというギルドはユグドラシルでも有数のギルドであったが、その方針としてはマイノリティと言わざるを得ないだろう。

PVPならともあれPKギルドと名を馳せる以上それは何方かというとながティブな印象の集団だ。

例え内輪では和気藹々としても、詳しく知らない他のプレイヤーからすれば要注意人物の群れである。

本来は異形種に対するPKに対抗するためのギルドであった筈だが、大半を占める人間プレイヤーから見れば異形種のPKプレイヤー集団でしかない。

真実など大多数の大きな声の前に掻き消されてしまう、それがまかり通ってしまう程度には心無いプレイヤーは当時のユグドラシルには多かつた。

必然的に付き合いの範囲は狭くなり、アインズウールゴウンは身内ばかりが集う狭いコミュニティとなった。

一部ギルドメンバーの現実での知り合いや、個人で親しい関係を築いたもの達とのささやかな交流もあつたが、それは本当に例外的なものだ。

ユグドラシルに置いてモモンガは誠実に務めたが、自分よりも楽しい人間は多く居たし、自分よりも優れた人間も多くいた。

そんな中で自身がアインズウールゴウンのギルド長となったのは、自分が優れ居ていたからではなく、アクの強いメンバーの誰にギルド長という特別な権限を渡しても何をするか判らなかつたからこそ。

割と毒にも薬にもならない自分の様な人間が選ばれたのではないかと思っている。単に自由奔放すぎるメンバーが管理職という義務を嫌っただけなのかもしれないが。

ある時、一方的な友人意識を持つ知人に弱音を零した事がある。

自分はアインズウールゴウンのギルド長として相応しいのだろうか。

人を率いる存在感カリスマで言うなら、たっちみー。

戦略性や知恵の周りというなら、ぷにと萌え。

知性や年長者としての包容力なら、死獣天朱雀。

ぱつと上げるだけでも、直ぐに三人それらしい名が上がるのだと、だが、友人殿は悩むそぶりも無く答えてのけている。打てば響く鐘の音のように。

「何を言わんや、モモンガ殿、たっちみー殿がそんな理由で選ぶはずがないと貴方自身が存じているでしょうに。貴方は仲間の和を重んじ、利他的で、人の欲する所を察する聡明さを持ち、皆の利が釣り合う落とし所を調整する事に長じている、何より、雰囲気とでも言いますか、皆を安心させる空気を纏っています。仁徳とは知性よりも武力よりも人の上に立つ者に必要な要素です」

長文による台詞を立て板に水を流すかのように淀みなく、返答が返る。

正直誰の事を言ってるんだコイツは、と思った事を否定できない。というか、モモンガ自身は己にできる事をいっばいいっばいになりながら務めていただけなのだ。

もちろん、皆が楽しくできる様にといい気持ちになかった訳では無いが。適当にやるのは仲間達に失礼だから。

「私が思うに、純銀の騎士殿はそこを買ったのだと思いますね」

「何か褒め殺しにされている気がするんですが」

「なに、忌憚の無い評価です。」

笑いを含んだ彼はその返答を翻すことは終ぞなかった。

終始納得がいかないとモモンガは思ったものだが、それもまたユグドラシルの楽しい思い出の一幕だったと言える。

彼はギルドメンバーではない、何故なら人間種だからだ。

ギルドの皆で定めた制約により、異形種にあらざる者はギルドメン

バーになりえない。

そも、比較的に親しいとはいえど、知人に過ぎず、アインズワールゴウンの41人とは比べるべくも無い存在だ。

彼が人族を辞め、異形種に転じたのならば話は別だが、結局彼は異形種となる事は無かった。

故に彼自身がモモンガを友と呼ぶまで、彼との間には一步線を引いていた。それは無意識なものではあったが。

アインズワールゴウンのメンバー、その多くが引退していき、さらに少なかった知人達も大半がこの世界^{ゲーム}去った。

そんな中でも、言葉を交わす相手が居た事はモモンガの無聊を慰めていた。

いまさらながらに思う、一つの事に拘り、友と呼んでも良い人物を、そうと思ひもしなかった事は些か不誠実ではなかったかと。

そう、ユグドラシルの終了が差し迫った今になって思うのだ。

☆ユグドラシル最後の日

某月某日それはDMMRPGユグドラシルサービス終了の日。

在りし日は100万人単位のプレイヤー人口を誇ったこのゲームも衰退し、現在ではアクセスするプレイヤーも1万人にも満たない。それでも、昔を懐かしみ一時帰還した者の姿もあり、平時よりは人が多い。

ここ、アインズワールゴウンが拠点ナザリック大墳墓もまた同様に。

その日、在りし日にアインズワールゴウンの黒い粘液ことへ口へ口は懐かしいゲームにログインしていた。

今の仕事への就職以降、その殺人的な忙しさにまさに命を削りながらの労働を続けてきた彼であったが、青春時代の黄金の一ページとなっていたゲームの終了である。

色の無い就労の日々は着実に彼の心を削り取っていたが

仲間の呼びかけ、おそらく最後になるだろうそれを受けて、無視を通すほど彼の心は乾いていなかった。

(より良い、もう少しでもいいから余裕がある所に就職できれば、仲間達と偶に遊ぶ位の時間はとれたのになあ……)

そう思わずにはいられないが、今の時代、転職等と言う概念はほとんどない、母体となる会社が潰ればそれだけで路頭に迷える。路頭に迷えば命の危機なのだ。

運よく、別の会社に拾われたのだ、それだけでも御の字だろう。ただ、それが恐ろしくブラックな企業だとしても。

有給などある筈も無く、残業手当など当然なく。

就労時間を大幅にオーバーしたデスマーチの果てに疲れた体を押しつけて懐かしいユグドラシルのゲーム筐体を装着する。

それでも皆は元気だろうかと、かつての仲間達の事を思い浮かべると、口元に笑みが生まれた。

ログインしてすぐにギルド長であるモモンガに伝言メッセージの魔法で連絡を取る。

割と早く返事が返り、転移門(ゲート)で迎えられた、ナザリック大墳墓に直接転移はその防衛機構上出来ないので一時間かけつつ、九階層へと移動する。

今となっては記憶もおぼろげだった懐かしい円卓間である。

そこにはかつて41名の仲間達が居たのだが、人影は残念ながら6つしかない。

何やら熱心に遠視の鏡を覗いていたが、へろへろの転移に気づくとそれぞれの性格が表れた挨拶を受けた。

「あ、へろへさんちーつす！」

「(*、ω、*ノ」

「遅い、だが良く来た」

「(*、艸、)」

「久しぶりだなあ、もう少し早けりや他の奴らも居たんだが」

「(*、3、)」

「へろへろさーん、いつぶりだっけ?」

「(*、ω、*)」

「お久しぶりです、本当によく来てくれました、へろへろさん。」

ちなみに、発言の人物は上から。

ペロロンチーノ

るし☆ふあー

ウルベルト

るしふあー

二式炎雷

るしふあー

やまいこ

るしふあー

モモンガ

である、なんだこのるしふあーさん率、顔文字の仕様速度が速すぎないだろうか?

と言うか、日本語をしゃべれこの野郎。などとメンバーの幾人かは思ったが口にはしない。

次々と上がる歓迎の声に不覚にも現実のへろへろの目じりに涙がにじんでいた。

話を聞くに、少し前ならまだ何人かがログアウトしたばかりなのだとか。

ギルド長が言うには本日中に41人全員が一度は顔見せに来てくれていたのだという。

流石はインズウールゴウンだ、メンバー全員が義理堅いとなんとか自慢したい気分になったのは子供っぽいだろうか。

「ところで、皆さん、遠視の鏡を熱心に見てましたが」

「ああ、そうそう、今ナザリックは攻め込まれています」

「(、ー、)ノ」

「なんと、8階層まで来てるんすよ！」

「すごいよねー、しかもソロ。」

「途中の階層守護者戦も見応えあったな」

「モモンガ卿が言うに、此処数年ナザリック攻略を続けて来た。あの意味生き字引の様な輩だそうだからな」

ナザリックに挑んだ回数実に2000を超えるというから驚きである、どんだけナザリックが好きなんだ。

作った側としても冥利に尽きるというものだ、そこまで言われれば興味も沸くので件のプレイヤーをへろへろも覗いてみた。

真っ白な全身鎧に身を包む白騎士とでもいうべき姿が目映り、仲間一人、ナザリック最強こと純銀の騎士たちみーが思い出された。

「あれ？この人、もしかしてセイバーさん？」

「へろへろ卿も知っているのか、吾輩は知らんのだが、どんな輩だ？」

「たちちみーさんみたいなタイプの人だね正義漢、異形種狩りPKのPKKとか一緒にしたことあるよ」

「なるほど熱血馬鹿か」

「この人もユグラドシル続けてたんだね、僕も余裕が欲しかったなあ、モモンガさんに聞いたけどまだ未解明の謎とか未踏破地域あるんでしょ？」

「ワールドサーチャーズが解明しているかもしれませんがね。」

ワイワイと和やかな会話が進む中で白騎士は8階層の荒野を進む、ポップするアンデット系エネミーを凱旋一色に薙ぎ払う姿は無駄が無く、いつそ美しい。

たちちみーと比べても遜色ない、体を動かす事になれた、玄人の所作だと思える。

セイバーの中の人もありアルではそっち系の仕事の人なのかもしれ

ないと、何気なくへろへろは思った。

しかし、その快進撃も此処までだろうと、へろへろも他の眺める6人もそう考えていた。

階層守護者のヴィクティムとナザリックの切り札のコンボは1500人のプレイヤーを全滅させたほどのチートと呼ばれて久しい代物だ、たつちみー本人でも無理と言う相手である、正直ソロでは無理だろう。

そう考えるなかで異形の天使の断末魔とそこから畳みかけられるナザリックの秘密兵器達が姿を現す。

これで終了である、8階層をソロで単独制覇と言うだけで偉業なのだ、何も恥ずべき事ではなく、むしろ称賛すらしたい。

サービス終了日になってまでナザリックに拘わった所に好感を覚えるもする。

なんなら、何か残念賞として六階層で話でもしてみたいが、そう思い、へろへろはモモンガに進言を考えた。——しかし、此処で事態は急転する。

白騎士が在るものを取り出したのだ、それは長くユグドラシルを離れたへろへろの朧な記憶を刺激する。

あれは……へろへろが記憶のひもを手繰るなか、メンバーの誰かが驚愕の声をあげる

「ワールドアイテム——光輪の善神だど!？」

光輪の善神（アフラマズダー）

世界級アイテムの中でも更にとびぬけた力を持つ20のアイテムの一つ

カルマ値——の対象に絶大な効果を発揮する、その効果範囲は世界一つを覆い尽くすレベル。

それはカルマ値極——が大半を占める。ナザリックにとって天敵と

もいふべき最悪のワールドアイテムであった。

光輪となつて広がり、ワールドアイテムの名に恥じない、ど派手で荘厳なエフェクトが奔る。

ゲームと言うシステム上、ナザリツクと言う拠点が破壊されると言う事は無いが、叩き出されるダメージは恐らく拠点到耐久値が存在した場合破壊するに十二分、地形が吹き飛んでお釣りがきそうなレベルだろう。

ワールドアイテムの光はそのまま第九階層の彼らの元まで届き。

荘厳な輝きと音響が彼らの声すら飲み込んだ。

ふあて、おーばーろーど3

アフラマズダー エラエクト
光輪の善神の効果は第八階層から始まり、ナザリックを順次覆い
尽くして更にはナザリックの存在するワールドマップを席卷した。

そしてマイナスベクトルに傾いたカルマ値を備えた存在は押し並
べてその影響を受け相応の損害を受けるに至った。

要約するとカルマ極マイナス値キャラクターは大体10ターンに
渡る継続ダメージ∞という頭のオカシイ数値を受けて大抵死んだ。

それは、最終日のユグドラシルのそこら中で起きていたワールドア
イテムぶっばの一つに過ぎなかったが、そんなものがそこら中で起き
ているあたり、正に盛大な花火大会である。

さて、観測者の皆様にはいまさらの事であるがワールドアイテムは
数々の無体な能力を持つ。

ゲーム上からデータ丸ごとデリート、魔法システムの改竄、運営に
直接打診し大体どんな願いでも叶う等々、そしてそれらに対して抵抗
の余地は無い、と言う、いかれた性能を誇っている。

それでも共通の欠点も備えている、それが同じワールドアイテム所
持者はその効果を打ち消せる、である。

そして、アインズウールゴウンはゲーム上200しか存在できない
ワールドアイテムの内十一種を所持するギルドである。

もつとも、その貴重性故に重要なタイピングでしか持ち出しは許さ
れないし個人での占有など以ての外である

そして現在はゲーム終了数時間前である、特に持ち出す理由も無
かったが故に、久しく離れたメンバーであったが故に、彼等はワール
ドアイテムを所持しては居ない。

ナザリックの在住のエネミーの多くはカルマ値がマイナスでない
ものを除き、恐るべきダメージにより即死や瀕死となっていた。

自動ポップモンスターは現在全てが綺麗に消えている。

そして第九階層円卓の間には常時通称モモンガ玉と呼び親しまれ
るワールドアイテムを装備するモモンガの姿しか残っていない。

「ここ、円卓の間にて駄弁っていた6人のメンバーもまた『光輪アフラマズダーの善神』威力に死亡しないし、瀕死のダメージを……

さらりとモモンガの掌で『山河社稷図』が躍る。

巻き取られた巻物状のそれがトレットペーパーが転がる様にその絵図を広げると今まで姿を消していた6人の姿が再度出現する。

「あー、びつくりした」

「(; | ;) / ~ ~ ~」

「酷い切り札を見たぞ」

「いや、ある意味、我らに挑む以上当然だったか」

「最終日だもんね、そりゃ、ラストエリクサーを使わない選択肢は無いよねえ」

「めがーめがあああ!?!」

「だ、大丈夫ですかペロさん」

……その姿は健在である。ついでに6人のプレアデスと執事のセバスの姿もある。

『山河社稷図』アインズワールゴウンの保有するワールドアイテムの一つ、対象を隔離空間に取り込む特殊なワールドアイテムである。

此処まで情報が出ればわかるであろうが、『光輪の善神』の発動の間、モモンガはこれを発動する事により、その隔離空間に仲間達を取り込み、その効果範囲外としたのである。

もともとカルマ値極善のセバスや善寄りのユリ・アルファは『光輪の善神』対象外だが、さすがのモモンガも個々のNPCのスペックまで完全把握している訳ではないのでまとめ取り込んだのだ。

「しかし、よく山河社稷図なんてものをピンポイントで持っていたものだ。」

「流石うちのギルド長、もしもの時には頼りになるね」

「(*、ω、*)」

「目があああああああ」

「こんなこともあろうかと！は浪漫だよな。」

「いやあ、そもそも、セイバーさん今回本気中の本気で攻略に来るって言うてましたんで、ワールドアイテム位持ち込みそうだと思います。」

弱冠一名、バードマンが強烈なエフェクト光の尊い犠牲となったが皆は気にしなかった。あと三分もすれば元気になるだろうし。

和やかに会話が続く中でも遠隔の鏡の向こう側では白騎士が前進を続け、すでに8層の守護者達は沈黙し、無人の荒野を行くがごとしであった。

「さて、どうする？よもやモモンガ卿渾身の最強戦力が抜かれるとは思わなんだが」

「ソロに最終防衛ラインを抜かれるとは思わなかったね」

メラメラと仲間達から立ち上るのはヤル気という名の覇気である。興が乗ったとか、なんか燃えて来たーとかやまいこさんが女教師怒りの鉄拳を素振りしてシャドーとかそんな感じのサムシング。

ゲーム最終日にきて和やかな終わりよりも、燃え尽きるぜヒートな闘争本能に火ついてきた様子であった。

「(、ー)ノ」

「いやホントはちよつと、皆に挨拶してログアウトする気だったけど……。」

いつの間にか姿を消していたペロロンチーノの姿が再び現れればそれはフル装備。

それに合わせる様に仲間達の姿が消えてはまた現れる、それは在りし日の最強の姿。

「あ、僕も、装備取りに行きたいんでモモンガさん指輪もらえますか

ね？」

「ええ、もちろん」

「くくく、他の連中がこのシチュウを知ったら悔しがるな」

ナザリックは不落の拠点、ならここはひとつ最後の最後まで不敗でありたい。

最終防衛線が突破されて此処に居たり、7人の心はちよつとばかり一つになった。

・アインズウールゴウン・ラストエイスズ☆だいじえすと

まず最初にプレアデスとセバスが第九階層の要所の守護に配置された。

これはナザリックに残されたNPC戦力の一つとして、白騎士セイバーの手の内を少しでも引き出す為である

今までの各階層守護者との戦闘を確認できていれば少しでも傾向と対策をとれただろうが、彼等が攻略者を認識したのがデミウルゴス戦からであったが故の事である。

しかし、戦闘は地味かつ堅実に終了。奇策も無くただのプレイヤースキルのみによる勝利である。

余りの危なげの無さに不機嫌にウルベルトの一言

「実はたっちみーの別アバターじゃないのかあれ？」

嘗てギルメン複数を相手にしてなお勝利を収めたAOGきつての最強近接戦闘者のチートじみた技量を思い出したのは他のメンバーも同様である。それでも、幾つかの消耗型のアイテムを消費させしめたのは行幸だと言える。

ただし、切り札はいまだに切られていない。いや、すでに善神の光輪という特大の切り札を切った後ではあるが。

もともと、ワールドアイテムを要するAOGに対するガチ攻略である。最低でも世界級対策に世界級装備を一つはまだ手元に残してい

ると予想される上にペロロンチーノからこの様な一言も出ている。

「あ、バザーで世界級が叩き売られてたよ。最終日だから捨て値だった。」

これにはモモンガも天を仰いだ。

世界に一つのオンリー壊れアイテムが露店に並ぶとか世紀末である。実際ユグドラシル最後の日なので、皆ラストはるまげどーんであつた。

下手すると一つ以上のワールドアイテムが飛び出すかもしれない、嫌なびつくり箱だ。

第九階層以降に時間稼ぎができるのは玉座の間の手前のモンスターコンボのみである。

これは100レベルパーティー複数を全滅せしめる戦力として配置されている初見であれば、此処で止まる筈だが。

その昔、たつちみーさんに模擬戦をさせた所、初見クリアをされた記憶がモモンガとへろへろにはあつた。

止められると、断言はできなかった。

時間はあまりない、セバス達が稼いだ時間で、緊急対策会議が開かれ、手早く戦術が構築される。

判りやすいのが残存戦力の大量投入である、67体のゴーレムと四色のクリスタルモンスター、そして7人による波状攻撃で逐次セイバーの手の内を晒す前に一気に叩くという案、作戦もあつたものではないが相手がワールドアイテムと言う核爆弾級の真価を見せる前に最大戦力で沈黙させるといふのはむしろ理に適っていると言える。

だが、此処で待ったが掛かる。ウルベルトの悪のプライドロールであつた。

「数に頼んでリンチとか王者のする事ではないぞ、ドンと構えて、迎え撃て」

ペロロンチーノが異を唱え、やまいこは脳筋思考でウルベルトを支持する。

どうせなら最後は派手に魅せる戦闘がやりたいというプロレス思考もあつたと思われる。

遅れてやって来た死獣天朱雀は状況を理解できなかったが、戦闘職ではなかったのでパーティプレイ推奨と割と地味に主張。

「あ、俺は忍者だからコソコソやる」

空気を読まず式式炎雷は奇襲からのバックアタックを宣言、忍者が不意打ちして何が悪いバローとの事。

ヘロヘロは武器を劣化させるからと先陣を切ると乗り気であるが、その実そろそろ眠気が酷く寝落ちしそうなので

今戦わないと、戦う前に敗北外決定しそうだという、世知辛い理由である。

るし☆ふぁーは皆が気づいた時には、レメゲトンゴーレムを起動しすでに戦って敗れて死に戻りしていた。

「(; ;)」

「何に勝手に先走ってんだお前!」

なおAOGメンバーの内モモンガを含め現在でもギルドメンバーであるのは4人のみであり、残りは脱退している。

死亡した場合のリスポーンポイントはヘロヘロとモモンガ以外はナザリツク外となるので、るし☆ふぁーは事実上脱落であった。

喧々諤々と円陣が組まれて作戦と順番が構築される。

まず最初に四色のクリスタルの間でヘロヘロとウルベルトが迎え撃ちそれが抜かれたならペロロンチーノとやまいこ、死獣天朱雀がパーティ戦を挑み、それでもだめならモモンガがトリを務め、式式炎雷は自由な遊撃を任された形に相なる。

息をつく間もなくセイバーが玉座の間に近づき、緊張のPVP初戦が始まる。

ちなみに、るし☆ふぁーは彼等の心から綺麗さっぱりなかったことにされていた。

「良くぞ来た、我らが居城に攻め入りし勇猛にして愚かなるもの、だがそれも此処までの運命だと知るがいい」

「己が運命は己で決める、災厄の悪魔王よ、その理、我が剣にかけて切り開こう」

「zzzzzzzz……」

「吠えたな人間！ならば足掻いて見せよ！」

「是！」

「zzzzzzzzzz……」

カッコいいロールプレイで応酬を決めるウルベルトとセイバーの二人だが。

この時すでにヘロヘロ氏は限界を迎えていた、台無しである。

それをあえて見無い事にして彼等はロールプレイを続行する、此れはこれで強者であった。

戦いは一人戦わず脱落したとはいえ、5対1である、数の上ならウルベルト側が優勢と見えるがその実、4色のクリスタルモンスターは何方かと言うと後衛タイプなので、後衛×5という残念バランス、本来存在していた67体のレメゲトンゴーレムが落とされた上に、タンク役の脱落が大変痛かった。

バフは効かしておいたが、それは相手も同じ条件、何気に部は悪い。足の速い攻撃魔法や複合属性の魔法を使い、デバフにバッドステータス、の特異系属性攻撃各種を叩きつけて行く。

手応えが伝えて来る、物理、魔法への防御力が高い。おそらく基本はタンク系なのだろう。

クリスタルからの地水火風は効果が薄い。

毒、効果なし

時間、効果なし
無、効果薄し
神聖、効果薄し
致死、効果無し
……効果なし、効果なし、効果なし、効果微、効果薄し……呪い、効果大——これか！

「——怨嗟を束ねし我が声を聴け、血の涙湛えし悲嘆の願い、届かざる祈りの果てに反転せしめ我が絶怒！」

特に必要の無い詠唱が何の思考も必要とせず、赴くがままに言葉となり、沁みついたPSが詠唱短縮の課金アイテムを最適化行動で消費する。発動するは絶命必死の超位魔法。

超位魔法の前兆に、いち早く白騎士は気づいたが、それでも間合いを詰める前に四色のクリスタルがそれぞれの属性の防壁を展開し、これを足止めする。

『——禍れよ世界！《大呪詛蠱毒厭魅》』

かくてウルベルト渾身の呪詛魔法が広間を包み込んだ。

広大な球体状の立体型魔法陣が現世と幽世の境界線を切り開き、超位魔法の効果範囲に悍ましい肉色の異形が留 まるところを知らず生まれ落ちて行く、増殖し続けるそれは、ついには力場の全てが肉の異形に満たした。

それは虚無より生まれ世界の果ての終末に全てを虚無へと還す、永遠に餓えた虚空の捕食者。

瞬間ダメージこそ、失墜する天空や大 災 厄に大きく劣るが、此の魔法は呪い属性で各種状態異常と長時間の継続ダメージを与える魔法であり、結果的な総合ダメージはそれらの直接ダメージすら凌駕する。

例えると一度に9999のダメージを与えるのではなく、秒間20

0程の防御無視のダメージを100秒間継続して与える魔法だとか思えば良い。

グロテスクな肉塊は蠕動し蠢動し超位魔法で形成された力場すらも押し広げ肥大化していく呪詛属性と呼ばれる負^{ネガティブ}属性と似て異なる特異な属性攻撃が拘束や麻痺への完全耐性を抜いて行動を阻害し複合的な多段スリップダメージを実現する。

100レベルプレイヤーと言えど無事では済まない魔法の直撃は戦線を大いに有利に傾けるに十分の筈だが、かつて廃神プレイヤーと呼ばれた41人の一人であるウルベルトは気を抜く事は無い。

無数の魔法を展開し、維持し、積み重ねて次に備える、戦士型のカーストプレイヤーの耐久力は極めて高い、たとえ最高火力の攻撃が決まったとしてもそれで勝負が決まる事は在り得ない、それに熟練のPVPでは最初の弱点が次の瞬間には完全耐性に切り変わる事も少くないのだ。

耐性突破により状態異常の足止めできる状態にしたが、既にそれは解除されている可能性がある、いやむしろ既に機能していないと想定するべきだ。

その想定を肯定するように、超位魔法の力場が縦に割ける空間が引き裂かれ物質^{マテリアル}界と次元^{アストラ}界の境目が一瞬姿を現す。それはある種見覚えのある特殊技能^{スキル}の効果^{エフェクト}だ。敵の手札の一つがつまびらかになる。鮮やかなそれを目前に驚愕と同時に情報^{カード}を切らせた事に悪魔は不敵に笑う。

「——次元断層、か」

それはユグドラシル公式チート職業《クラス》ワールドチャンピオンの持つ代表的な特殊技能^{スキル}である。

正しく使えばワールドアイテムの特殊能力すらも相殺可能という攻防一体のスキル、防御力も破格なら攻撃力も破格、第十位階魔法リアリティスラッシュ

現断^{ワールドブレイク}は一部を除けば最高の攻撃力を備えていると言われるが、その魔法は次元断層の劣化版にしか過ぎないと聞けばその破壊力が

どれほどか理解できるだろう。

超位魔法や大災厄にも比肩しうる物理系最高峰の攻撃手段だが、それでも耐久力に優れるカンスト近接職を一撃で倒す様な事は出来ない。

——だが、逆を言えば、100レベルと言えども耐久力に劣りさらに物理防御の低い魔法職は一撃でも甚大なダメージとなると言う事でもある。特にウルベルトは^{パラメータ}全能力を魔法の攻撃力に極振りした魔力系魔法詠唱者であった。

「……勇猛なる者よ、卿を称賛しよう……見事だ。」

ザアツつと切り裂かれた体の内側から炎が奔り崩壊してく、悪魔王はそれでもなお大きく礼をとって見せた。

その後ろでへろへろが寝落ちで^{ロマンティックなアッセンユ}神秘的な崩壊をしていたが、まあ、置いておこう。

デスナイト入ってます！

私の名は鈴吹弥太郎、どこにでもいるちよつとオタクな趣味を持つ社会人である。

主にゲームと読書を中心にそこそこに趣味にお金をかけている。ただ同人誌等を買いたるは数年前に辞めて久しい。

卒業したというより、お金がナイルのせせらぎの如く飛び立って行くので自重しただけである。

見ると買いたくなるので、出来るだけ見ない方向にしたのだ。

最近の趣味はMMORPGっぽいものを題材にしたウェブ小説オーバーロードを読むことカナ。

ふと公園を通りがかったところ、公衆トイレの横のベンチに一人の骸骨が座っていた。胸元の肋骨を大胆にさらけ出したローブの骸骨は私を見ておもむろにこう言うのだ。

「(アンデッドを) やらないか」

「うほ、 良いオーバーロード」

等と言う、ワケのわからない妄想を益体もなく考えていた所で暴走して歩道まで脱輪してきたアーマードジープ (ただのHAMMERである) にはねられた。

……と言うのが私の記憶する、今迄での最新の記憶である。

で、現在の私がどういう状況かと言うと、目の前にえらい豪華な恰好の顎の尖った骸骨がいて

年若い女の子と幼女を背にして、ビツッと格好良い仕草でそこら辺になんか香ばしい臭いを点ててたぶん死んでる鎧姿の兵士？を指さし

「デスナイト、この村を襲っている騎士共を殺せ」

とかのたまっている所なのである。

うむ、どう見てもオーバーロードです、ありがとうございます。

アニメも見たよ！モモンガさん！！

いやあ、なんとという事でしょう、死ぬ瞬間の走馬燈が人生の振り返

りではなく

最近マイフェイバリット作品の世界をリアルにイメージするバーチャル妄想だとは。

ある意味、ロツクな感性してんな私。

しかも、立ち位置的にどうも私、デスナイトじゃん。

両手を見てみるとスケルトンな骨だしなんかごっついフランベルジュな剣と盾持つてるし

「どうした、俺の命に従え」

おっとまごついてる所為か、モモンガさんが不審に思ってるぜ。

今の彼も大体の状況が未知だらけで実験段階だもんね、下手なことをすると速攻で消されそうだよ

そいつはまずいぜ私、走馬燈つてのは人生生まれてから死ぬまで圧縮した回想だとか聞いた事あるけど。

走馬燈、始まってすぐ終了とかそれはそれで簡便よ、と言うかせっかくオバロなんだからいろいろ楽しみたいYO!!

あと、はよ行かんと村人がそれだけ死ぬからね！私は多分カルマ値＋50くらい、あるから助けに行くぜー！

バツとモモンガさんに敬礼をしたあと、速攻全力ダツシユをきめる。

「ヴオオオ（ノ・ω・）ノオオオオオオー!!!（いつて来ます！いてもうたるわ法国のあほどもー）」

「……………えっ?」

おっと、人語がしやべれねえや、雄叫びしか出やしねえ

唾然とする、モモンガさんを放置してレッツゴー私

タンクはあとからアルベドさん来るしだいじょーぶだいじょーぶ。

あと100レベルのオーバーロードをまともに傷つけられる奴なんてナザリツクの連中かドラゴンロードくらいしかいねーよ。

「ヴオオオオオオオオ——!!!」

なんだあれは

なんだあれは

なんだあれは!!

それは昨日までと変わらなくそつたれな作業の一環でしかなかった。

罪もない村人達を、自分達の掲げる正義とうなの独善で皆殺しにする、そんなくそつたれの仕事だ。

大を生かすための、小なる犠牲、そうする事で結果的に人類全体にとってはプラスになるそんな善行

まったくクソツツタレな仕事だ、どんな綺麗事で飾ろうと自分の手が血まみれなのは変わらない

本国の高司祭達は一言二言程度に心にもない遠まわしの褒め言葉を下さるだろうが

六大神はきつと許しはすまい、死後は死の神スルシャーナが治める冥府の中でも最も罪深き者の地の獄行きは免れまい。

心を凍らせ殺しを作業と割り切らなければ耐えられない。

そんな憂鬱な作業が始まってしばらく

死んだ目で遠くを見た彼、エリオンの視界に異常な影が映った。

最初は小さな人影であったが、それはみるみる内にと言うのもおこがましい速度で大きくなる。

大きい、2 mどころではない、おそらく4 mはあろうかという巨体の戦士、その相貌は骸骨のそれである。

生者ではありえず、そして圧倒的な存在感は幻覚でも何でもない実在する存在だと証明している。

悪夢のような姿にエリオンは思った、ああ、死の神の使いが迎えに来たのだと。

目前に迫る死の使いを目に、次の瞬間、彼の意識は途絶えた。

「い、いやだー」

「死にたくない！」

「神よ！」

手足が千切れ飛び、血しぶきが盛大に舞い上がり、そんな阿鼻叫喚な悲鳴がそこかしこに響き渡る。

BGMとしては大変テンションの下がるあれそれ、だがそれを止める気はない。

騎士さん達よ、今まで何人の人がそうやって命乞いをしたと思っているのかね？

君等は殺す仕事をしているんだから生き死にかかわるのは不思議じゃないさ

でも、ここ最近のうちに殺してきたのは、この割と無常な世界を必死子いて生きていた村人だよな？

私は正義の味方じゃないし、博愛主義者の聖者でもないが一言言う。

「ヴオオオ（ノ・ω・）ノオオオオオオー！！（だが許さん！！）」

これは今迄、なぶり殺しにされた村人の分！

これはエンリの父の分！

これはエンリのかーちゃん分！！

これは両親を失ったネムの分！！

そしてこれは私のなんかノリによる怒りの分だ！！

シールドバツシュのサムシングをずばんずばんと帝国の恰好をしたスレイン国の騎士、長いので略してスレ氏共に叩き込む。

すぐには殺さんぞー、じわりじわりとなぶり殺しにしてくれるわ！！
村人達の無念を知るがよいわ！！

あ、ベリゆうす隊長（笑）は今生かしておく、ゲス野郎なので脅せばサクサク色んな情報を吐いてくれるだろうしね！！

まあ、大した情報は持つとらんだらうがな

あとロンデス・ぐらつぷらーだっただっけか？。実質隊長の彼も生かしておくか、素直に情報は話さんだらうけどモモンガさんの支配とか精神操作の前には無力だろうしな。

そいやそいやと、命乞いをするスレ氏共にケツバツシュを叩き込

む度に人がポンポンと宙を舞う、逃げる奴は足ちよんぱである。

足をまるつと切られて取れた連中は、ほつとけば出血多量で死ぬだろう、くびちよんぱではないから死んだらゾンビになるな、たぶん。デスナイトの能力ってかなりえげつない。

残酷ですね、そうですね、でもあんでつとだから精神的に影響がないぜ!!

まじ人間辞めちゃったね、モモンガさんの気持ちがちよつとわかるよ、まあ、理性的にモラルは保ちたいものですが。

「そこまでだ、デスナイト」

ケツバツシュに熱中し時間を忘れていると。いつの間にか空にモモンガさんとガチフルアーマーのアルベドが浮いていた。

モモンガさんはちよつとやそつとの事ならスルーしてくれるけど、アルベドは洒落が通じないので即振り返ってモモンガさんに膝を着いて礼のポーズをとる。

いや、正直正式な礼儀作法なんか知りませんが、アニメとかゲームとかの真似で礼っぽい感じにしているのです。

後はモモンガさんが話を回してくれるだろう。

一仕事終えた事に私はすがすがしい気分になった、背景は邪悪な魔導士と暗黒騎士とアンデットバーサーカーと死屍累々の地獄絵図だけどね。

モモンガさんは原作通り、あれよあれよという間に交渉を成立させて人の良さそうな村長の家に行ってしまった。

法国の連中はへロへロになりながら開放された、割と死人は少ない。

ほら、死体よりも傷病兵の方が軍にとっては足枷になるそうだから、ちよつと手加減してみました。

隊長と副隊長なのはいつの間にか姿が消えてた。たぶん、エイトエツジアサシンとかいうナザリックの影の仕事人な人達が回収したんじゃないかと思う。

ふへー、さて、これからどうしようね、ぼへーと農村を見渡す。

改めて思うと背が高いなデスナイト、モモンガさんからして2mく

らしいの背丈の骸骨だけどそのモモンガさんよりもでかい。

何処かのアツパーカットで滝を真つ二つにするムエタイチャンピオンよりもでかいもんなあ。

おかげで遠くまでよく見える、すげえ新鮮だわ。

ポーっとしてしていると村人たちが泣きながら死体を集めていた。

縁者の死体に泣き継る女性の姿も見える、人間だった頃であれば、何とも言えな鬱々とした気分になっただろうが

現在では、何も内側から湧き上がってくる感情がない、アンデッドの精神安定効果とは別の、種族的な共感性の欠如だろう、此れもモモンガさんが書籍とかで経験していたな。

ただ、元人間の理性としては、哀れで可愛そうだと思う、感情は伴わなくとも。

んーんー、手伝っても良いが、私の様なデカこわアンデッドとか近付かれたら怖くて逃げるだろ。

ヴォーとかしか喋れぬ我が身がちよつと憎い、そう言えば口唇虫つて発声用のアイテム(?)だったかがあつた気がする、モモンガさん用意してくれんかなあ。

／がぜふ

「あちらのアンデッドは？」

暇に飽かせて花を摘んで墓にお供えをしているといつの間にかガゼフ一党が来てた。

なんとなくモモンガさん、私が抱えた花束を見てポカーンとしてる様に見える、嫉妬マスクで顔は見えないんだけどね。